公益社団法人　京都モデルフォレスト協会情報誌「以森伝心（いしんでんしん）」第 38 号 2017 年春

モデルフォレスト

以森伝心

理事長　柏原康夫筆

No. 38

京都の森を守り育てる運動に参加しませんか

巻頭特集

伝統をつなぐ

京漆器を支えた丹波の漆

特集２

森林の現状を考える

合板製造

インタビュー

林ベニヤ産業株式会社舞鶴工場　藤原 仁司氏

京都の森の仲間たち

京丹後長岡緑の少年団

代表　嶋田 喜一さん

豊かな森を次世代へ

第 40 回全国育樹祭概要報告

伝統をつなぐ

京漆器を支えた丹波の漆

強固な接着剤として、美しい塗料として、古代から使われてきた漆。その歴史は古く、縄文時代の遺跡からも発掘されるほど。高価で貴重な漆や漆器は、朝廷への税や献上品として、また特産品、特に外貨獲得のための重要な産物として各地で盛んに生産されていました。今回は、夜久野町で漆生産の伝統を次代に引き継ぐため活動されている岡本嘉明さんにお話を伺いました。

漆の集積地として栄えた夜久野

ウルシの木。漆掻きまでには 10 年以上必要

「明治時代には、漆掻き職人は500名以上いました。」ウルシの木から樹液を取る職人を多く擁し、漆の集積地として栄えた夜久野ですが、その後安価な中国産などの外国産漆が台頭し、また、プラスチック製品の登場で人々の暮らしから漆器が消え、漆産業は衰退していきました。

そうした中、丹波では、戦後間もない頃に消えつつある漆生産の復活を目指し衣川光治氏が丹波漆生産組合を立ち上げていました。岡本さんはUターンで養鶏業を営む傍ら、衣川氏の活動を知り、氏亡き今も丹波漆の復活に向けて奔走しています。「人恋しかったんですよね。都会から地元に戻ってきて、何か地域の皆と一緒にやりたかった。」

伝統の漆掻きを若い世代へ伝えたい

岡本さんの活動は実際の漆掻きや、生産組合を前身とするＮＰＯ法人の運営だけにとどまらず、ウルシの木の植栽、小学校への出前授業と多彩です。課題は後進の育成。「現状では、漆掻きだけでは食っていけません」。ウルシの木１本から取れる漆は約２００ccで、採取までは植栽後１０年程が必要です。現在の生産量は年間数 kg と、産業として成り立たせるには及びません。生産量を増やすため１,０００本を目標に植栽を続けていますが、その植栽にも苦労されています。以前は「かぶれる木だから」と地主さんの了解が得られず、現在は増えた耕作放棄地への植栽で整地・栽培方法に試行錯誤されています。獣害対策も必要となり、漆を掻くまでの手間や費用が一層かかるようになりました。

それでも時折、漆に魅せられた若い人が飛び込んできます。「伝統的な漆をやりたいと全国から探して来てくれるんですよ。彼らがなんとか生活していけるようにしな

あかんと思ってます。」若い人たちの話をする岡本さんの顔は輝いて、彼らの成長と丹波漆の復活を楽しみにされているのがよくわかりました。

漆を布ですり込む作業（やくの木と漆の館提供）

漆により支えられてきた京都の技術と文化を後世に

丹波漆は乾くのが遅い反面、透明度が高く、伸びがいい。古くから京漆器や仏像・仏具、建築などに使われることで京都の文化を支えてきました。伝統的な原材料の供給が途絶えることは、文化財の修復にも深刻な影響を及ぼします。漆掻き職人が減ることで漆掻きの道具を作れる鍛冶屋は全国でも 1 軒のみとなりました。ひとつの技術が失われることで無くなる技術や文化はひとつではありません。

漆器は高価で扱いが難しい…忙しい現代の生活になじまなくなったのもそんな理由からかもしれません。確かに電子レンジや食器洗い乾燥機での使用はできません。でも効率優先の暮らし方にふと疑問を感じたら、職人が気の遠くなるような手間をかけた美しい漆器を、少しの手間をかけて使ってみてはいかがでしょう。漆器は使うほどに艶が増し、その美しさは使う人によって熟成されていきます。自分だけの漆器を「育て」、「愛でる」。疲れ切った現代人にこそ必要な時間なのではないでしょうか。

聞き手、文　協会広報ボランティア　山田　朋子

塗り上げられた漆器（やくの木と漆の館提供）

お話を伺った方

岡本嘉明さん
（特定非営利活動法人丹波漆　理事長）

取材後記

やくの木と漆の館では館長の高橋さんにご案内いただき、たくさんある漆器制作の工程も丁寧に説明していただきました。精製にも手間がかかったり、乾かすために温度・湿度の調整が必要だったりと漆が「生き物」に感じられるお話もたくさん聞くことができました。館内には漆が使われている工芸品も展示されていて、「こんな所にも漆が？」と驚き、漆が日本の文化に欠かせない物であったことを実感しました。熱心に説明している高橋さんも漆に「かぶれた」お一人だなぁと思いました。

やくの木と漆の館での様子（福知山市）

取材協力：やくの木と漆の館　　写真協力：上家　祐

Interview

木材流通の上流である森林から最終的に製品が使われる所まで、つながりの中で事業を行っていることを実感しています

林ベニヤ産業株式会社
舞鶴工場

藤原　仁司さん

森林の現状を考える ── 合板製造

ラワン材から国産材へ

もともと大阪で合板の製造販売をしていましたが、1967年に舞鶴に現在の第一工場を建設しました。当時の原木は南洋産のラワン材が主だったので、港から下ろした原木を海に浮かべたまま貯留できるこの地が適していました。

林ベニヤ舞鶴工場遠景

しかし、創業者の林一雄は、ラワンの調達が持続可能なものであるかについて早くから危惧を抱き、ロシアの針葉樹カラマツ（ラーチ）に着目しました。針葉樹は植林等による更新が可能です。ラワンより細いラーチを合板用に桂むきできる機械を機械メーカーと開発し、1982年には針葉樹合板専門の第二工場を建設しました。その後、1992年のサラワクショックで南洋材価格が高騰した際、日本の各社が針葉樹合板に切り替えていきましたが、我々が先行していたからこそ可能になったという自負はあります。2005年には我々の扱う原木の全てが針葉樹になり、2006年以降は国産材の比率がどんどん増えています。

かつら剥きの様子

ここで作られた合板は多くは木造住宅の屋根、床、壁の下地として使われます。価格や供給量の面からスギが多いのですが、合板の材料としてはやわらかく、水分も抜けにくいので難しい面があります。最近はヒノキとスギを重ね合わせた複合合板も作っています。

「山をよくしたい」という哲学

昨年の原木の国産材比率は78％ほどですので、今年は80％を超えるのではないでしょうか。ただし、これくらいが限界ではないかと考えています。というのが、月に2万立米の原木が必要なのですが、年間を通じて安定的に調達するにはこれを国産材だけで賄うのは難しいからです。運搬コストから考えても、できるだけ京都府産材を使いたいところですが、国内でも冬は雪で作業ができなくなるなど供給体制の問題も大きいです。最近では、府北部にストックヤードができたので調達しやすくなりましたが。また、各府県で地域産材認証制度が創設され、特に京都府産材は量が多いので原木の置き場も分けています。

京都府産材合板

京都府内産材置き場

バイオマス発電で未利用材の有効活用

このたび、木質バイオマス発電を始めることになりましたが、これまでも工場で出る端材は、ボイラーで燃やしてその熱を合板製造時の乾燥に使っていました。これもバイオマス利用です。発電については、通年で考えると工場の稼働日数の方が少ないのが課題でした。そこで、これまで合板用に使える部分のみ仕入れていたものを、伐った木を丸ごと仕入れ、これまで未利用だった部分をチップ化して発電用の燃料にする、という方法を考えました。これでこれまで林地に残されていた未利用材が有効に活用されることになります。

製造過程ででるチップ

森林から製品が使われるところまで

地元京都府産材を使いたいので、出荷される量が増えることを願っています。最近は当社も山林を所有するなど森林組合との関係を深めています。

この会議室は、最近改装しましたが、せっかくなので自分達が作っている合板をそのまま壁に貼りました。保温性が良く、ここで社員の健康診断をした時も先生に大変評判が良かったです。机の天板もわが社の合板です。木材を扱う会社としてとても良い雰囲気になりました。木材流通の上流である森林から最終的に使われる所まで、つながりの中で事業を行っていることを実感しています。

聞き手、文　協会広報ボランティア　井上　和彦

PROFILE

藤原 仁司さん
林ベニヤ産業株式会社　舞鶴工場長

京都の森の仲間たち
― 府内緑の少年団紹介 ―

京丹後長岡緑の少年団
団長　嶋田喜一さん

少年団の皆さん

私たちは、日本海に突き出た丹後半島の中程に位置する京丹後市峰山町長岡で活動している地域の少年団です。京都で開催された全国植樹祭に向けて平成２年６月に地区の有志で始め、今年で２７年目となりました。現在の団員は、小学生２６人と中学生５人。地域の指導者とともに、毎月１～２回くらい様々な活動を行っています。

大変さを実感し、感謝の心を養う「奉仕活動」

新年度の最初の活動として４月に緑の募金活動に取り組んでいます。みんなで大きな声を出してお願いする大変さを学び、協力してくれる人の気持ちに感謝する心を養います。

秋には地域のゴミ拾いをし、ポイ捨てしないこと、空きカンなどを資源として再利用することの大切さを学びます。自分たちの活動時にも、「来た時よりも美しく」をモットーとしてゴミの持ち帰りを徹底しています。

緑の募金活動の様子

「自然の恵み体験活動」で森の豊かさを体感

コナラなどの原木を指導者が手に入れてきて、シイタケ栽培を行っています。団員たちがドリルで原木に穴を開けてシイタケ駒菌を打ち込み、仮伏せや本伏せといった作業を行います。木から出てくるシイタケは感動的で、春と秋には焼きシイタケや混ぜごはんを味わいます。

間伐材を利用した木工教室も開催しています。府の林業担当者や森林組合職員の協力を得て、ノコギリやカナヅチの使い方を教わり、木の加工のしやすさや温かみを感じ、木材を利用する事が森林の保全につながることを学びます。

森の恵みをいただくシイタケ栽培

また黒豆やサツマイモの栽培、餅つきなど四季折々に自然の恵みを楽しんでいます。

ふる里の自然に親しむ「自然を楽しむ活動」

身近な里山の探検・自然観察会を春、夏、秋の３回行っています。丹後半島の中でも地域によって山や樹木の様子が大きく違い、季節が変われば大きく変化する事を体感します。さらに夏山の１泊キャンプでは、テント泊や真っ暗な山道を歩くなども良い経験となっています。

この他にも、集落の中を流れる川の水生生物調査、公民館の窓際でのゴーヤ緑のカーテンの栽培などの「環境を考える活動」にも取り組んでいます。

福島の子どもたちとともに学んだ緑化交流事業

例年の活動に加え、昨夏は福島県と京都府の青少年緑化交流事業に参加しました。福島県の子どもたちと２泊３日を共に活動し、震災後の緑化による復旧・防災活動を体験し、団員たちにとっても大きな経験となりました。

これまでとこれから、次世代に向けて

世帯数３７０戸人口約１，２００人と小さな長岡区ですが、生徒数約９０人の長岡小学校があり、このうち対象学年である３年生以上６６人の３９％が団員です。当初は４年生以上を対象としてきましたが、生徒数が減少する中で対象学年を広げ、何とか団員確保を図ってきました。幅広い活動を行うことにより中学生になっても活動を続ける団員も出てきています。創立時の団員たちももう４０歳近くになっているので、今後は彼らに指導者になって活躍してもらえたらなあと考えています。

創立以来の入団者総数は、団員１９７人、指導者３９人の計２３６人となりました。昨年１０月には第４０回全国育樹祭に参加し、万感の思いで団員たちの行進や活躍の様子を見守りました。これからも地域の子どもたちと共に、豊かな丹後の自然を題材に、みんなでのんびりと楽しみながら続けていけたらと願っています。

第40回全国育樹祭が開催されました

多数の皆様のご協力により、昨秋10月、京都府内で第40回全国育樹祭が開催されました。協会でも、全国の緑の少年団が一堂に会する「全国緑の子どもサミット」を京都府、国土緑化推進機構と連携し開催したほか、各種行事で府内の緑の少年団の皆さんが活躍されました。

10月8日(土)

お手入れ行事 in京都府立山城総合運動公園 ふれあいの森（宇治市）

平成３年に開催した第４２回全国植樹祭で天皇皇后両陛下がお手植えされた北山スギ及びシダレザクラを皇太子殿下がお手入れされました。

10月9日(日)

式典行事 in京都府立府民の森ひよし（南丹市）

全国緑の少年団活動発表大会入賞団体、全国育樹活動コンクール等の表彰行事のほか、京都らしい演出によるアトラクション等による式典行事に約４，０００人が参加しました。

併催行事

10月8日(土)

「国際森林シンポジウム」～育林交流集会～ inガレリアかめおか（亀岡市）

主催：京都府、公益社団法人国土緑化推進機構

林業関係者、企業、団体、大学、ボランティアを含む幅広い層が参加して、森林づくりについての講演やカナダからの事例紹介を含めたシンポジウムが行われ、約３５０人が参加しました。

10月8日(土)

「全国緑のこどもサミット」～少年団活動発表大会・交流集会～

主催：公益社団法人国土緑化推進機構、京都府、公益社団法人京都モデルフォレスト協会

全国から選出された緑の少年団と京都府内の緑の少年団が中丹文化会館（綾部市）に集い、アルピニスト野口健さんの講演に続き、日頃の活動を発表しました。夕方からは、丹波自然運動公園（京丹波町）で交流集会が行われました。

記念行事

10月9日（日）～10日（月）

森林・林業・環境機械展示実演会in長田野工業団地アネックス京都三和（福知山市）

主催：京都府、
社団法人林業機械化協会

全国の林業機械メーカーによる最新の林業機械などの展示・実演等。

10月10日(月)

森の京都エクスカーション in丹波広域基幹林道（京丹波町、京都市京北）

主催：第４０回全国育樹祭
京都府実行委員会

丹波広域基幹林道ウォーキング、林道沿線の森林散策など。

事務局からのお知らせ ―活動報告―

平成28年12月

平成29年用全国ポスター原画コンクールに府内からの応募作品が入賞

全国の小中高校生を対象とした「平成 29 年用国土緑化運動・育樹運動ポスター原画コンクール（公益社団法人国土緑化推進機構主催）」及び「平成 29 年度愛鳥週間用ポスター原画コンクール（公益財団法人日本鳥類保護連盟主催）」において、京都府からの出品作品が入賞しました。

入賞作品

左（緑化）：『小学校の部』
国土緑化推進機構理事長賞
山田　諒
（亀岡市立亀岡小学校４年）
右（愛鳥）：『中学校の部』
連盟会長賞
小林　百花
（京都市立深草中学校３年）

平成29年1月27日　京都木材会館(中京区)

企業等参加の森林づくり研修交流会及び活動相談会を行いました

普段森林づくりに関わっておられる、またこれから参加を検討されている企業の皆さんを対象に、研修交流会及び活動相談会を行いました。植樹の基本的な知識についての講義のあと、既に森林づくり活動に参加されている企業の活動について事例発表をいただきました。

平成29年2月8日　京都市中京区内

緑の少年団活動と京都モデルフォレスト運動を結ぶ次代を担う「京都山キッズ」応援協定を締結

昨秋開催された第 40 回全国育樹祭で活躍した緑の少年団と、十周年を迎えた京都モデルフォレスト運動との連携を深めながら、それぞれの活動を一層強化し、京都の森の豊かさが未来へと確実に引き継がれるよう、京都府緑の少年団連絡会、京都府と協会が、緑の少年団や森林づくりを担う青少年の育成を図ることを目的とした「京都山キッズ」応援協定を締結しました。

平成29年2月4日　スチールの森京都(南丹市)

十周年記念講座「森林をフィールドとした体験事業のための安全管理と実践講座」を開催

森林をフィールドとした体験学習や森林環境教育、森林ボランティア等を企画・指導される皆さんを対象に、京丹後市、亀岡市、京都市や大阪からもご参加いただきました。リスクマネジメントの基礎についてワークショップを交え学んでいただいたほか、野外調理実習も行いました。
（「緑と水の森林ファンド」助成事業）

緑の募金ご協力のお願い

緑の募金は、森づくりや緑化活動、「緑の少年団」活動に使われています。皆様のご協力をお願いいたします。

木製品を使うことで元気な森林を増やしましょう

※府内産木材を使用したグッズによる募金も可能です。
（詳しくは事務局までお尋ねください）

● 郵便振替や銀行振込で

どこでも、誰でも募金ができます。

1. 郵便振替
00990-1-83253
公益社団法人
京都モデルフォレスト協会

2. 銀行振込　京都銀行府庁出張所
普通　3154305
公益社団法人　京都モデルフォレスト協会
理事長　柏原 康夫

● 商品購入や募金箱で

「緑の募金付き商品」を購入したり、各所に設置された「緑の募金箱」に直接募金することで、ご協力いただけます。「緑の募金付き商品」開発・販売や募金箱の設置等、様々な形でご協力いただける店舗様、事務所様も募集しています。

NISSIN ELECTRIC
NTT docomo
URASENKE 裏千家
一盌からピースフルネスを
茶の湯に出会う、日本に出会う

発行:公益社団法人 京都モデルフォレスト協会
〒604-8424 京都市中京区西ノ京樋ノ口町123　京都府林業会館3階
TEL&FAX 075-823-0170　E-mail kyomori@kyoto-modelforest.jp
URL http://www.kyoto-modelforest.jp　facebook https://www.facebook.com/KyotoModelForest
2017年春発行

入会案内資料をご希望の方はご連絡ください。